5.1.2　外部評価会―課題研究サポート　『多様な立場、視点からの言葉』

・開講ブース数：8（前年度 10 ブース、前々年度 6 ブース）
・参加生徒チーム数：のべ 25（前年度 36 チーム、前々年度 39 チーム）
・今年度は 6 月に 1 回、10 月に 1 回の計 2 回開催した。専門分野の教授や同窓会の方々から様々な助言をいただき、それを受けた生徒がメンターの先生とよりよく研究を進めていくためにも、例年と比べて実施の早い 6 月に、第 1 回目の外部評価会を実施した。
・昨年度に引き続き、「⑶分析」では外部評価会に参加したチームと非参加チームとで ISS チャレンジの得点平均や得点率に差が見られるか、2018 年度のデータと照らし合わせながら比較分析を行った。同時に「個人での研究」と「複数人での研究」とで得点率に差が現れており、複数人での研究で、かつ外部評価会に参加するチームの得点率が高い傾向となった。

⑴目的

生徒の課題研究の計画・内容の精査を行うとともに、外部評価者からの助言を得て研究の充実を図る。また、今後の継続的な支援ネットワーク構築の契機とする。

⑵実施概要

・日時　平成 30 年 6 月 15 日（土）　10 月 19 日（土）
・形態　校内３～４の教室を使い、ブースごとに 1 チーム 10 分程度でプレゼンテーションを行った後、講師から質疑応答・評価・助言を 20 分程度でいただく。
・講師

東京学芸大学 出口 利定 学長　　同 自然科学系　鎌田 正裕　教授
同 人文社会科学系　佐藤 正光 教授　　同　教職大学院　赤羽 寿夫 教授
同　教職大学院　藤野 智子 教授　　同　自然学系　狩野 賢司 教授
同　生活科学分野　南　道子 教授　　本校元教諭　若宮 知佐 教諭
同窓会泉旺会　野村純一 氏　宮本眞奈美 氏　山口勝業 氏
同窓会啓泉会　萬屋杏菜 氏（6 回生）　荒木稜介 氏（6 回生）
春田壮史 氏（7 回生）　周培文 氏（7 回生）　山内奏人 氏（7 回生）

⑶分析

2018 年度の分析に習い、今年度外部評価会の参加群と非参加群ごとに、「研究計画書」「研究経過報告書」「最終論文」の３段階における得点（得点率）の推移を比較した。今年度は 2 回の開催で 25 チームの参加があり、そのうち 4 チームが 2 回とも参加している。非参加群は 33 チームである。なお、参加した 25 チームの中には ISS チャレンジでの研究を途中でリタイアした２チームが含まれているが、今年度のデータを算出する際にそれらは除外している。

2018年度	研究計画書	研究経過報告書	研究論文
満点	30	30	42
参加群の得点（得点率）	19.71（66%）	20.48（68%）	27.32（65%）
非参加群の得点（得点率）	18.98（63%）	15.18（51%）	23.29（55%）

2019年度	研究計画書	研究経過報告書	研究論文
満点	30	30	42
参加群の得点（得点率）	19.47（65%）	18.65（62%）	26.56（63%）
非参加群の得点（得点率）	16.39（55%）	14.48（48%）	19.73（47%）

図１　2018 年度・2019 年度　外部評価会参加群/非参加群別 平均得点（得点率）

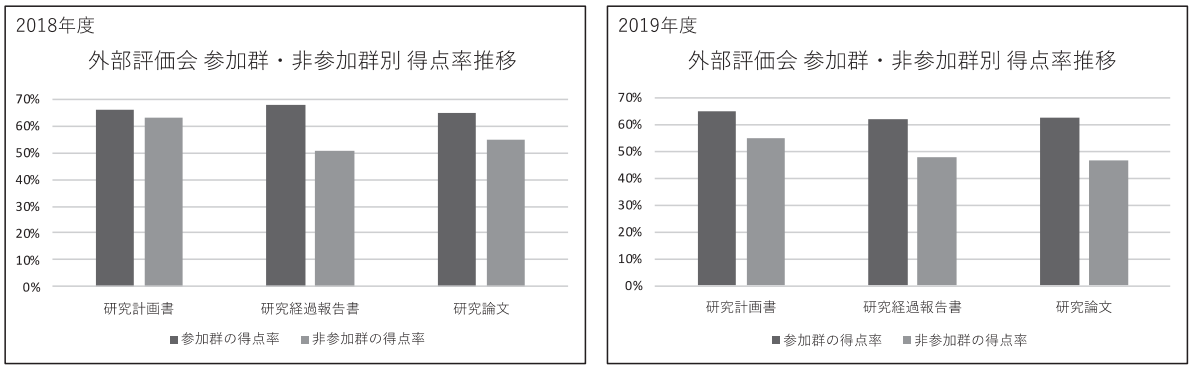


図２　外部評価会　参加群・非参加群別　得点率推移

2019 年度において参加群の得点率は概ね横ばいとなっており、60%台を維持している。昨年度の参加群は研究経過報告書こそ得点率が 70%近くになったが、最終の研究論文に大きな差は生じなかった。非参加群の得点率は少しだけ異なる傾向を示した。昨年度は谷を描いたのに対し、今年度は緩やかに下降をし、得点率も 46%と昨年度を下回る結果となった。

ここで、参加群と非参加群の中でも個人による研究と、2 人以上の複数人による研究とで、得点率にどのような特徴や差が出ているか、分析結果を示す。

図３にも示すように、個人研究のチームで参加群と非参加群とでは、参加群のチームの方が得点率の伸びが良く、最終的に７%の差が出た。外部評価会に参加した生徒の多くが、外部の方から時に厳しい意見や指摘をいただくものの､客観的な評価を得られることで視点を新たにすることができ、研究を進められたと感想を述べている。

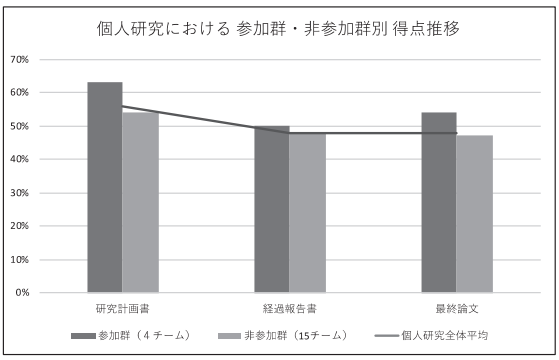
さらに特筆すべきは図４からもわかるように、複数人による研究でかつ外部評価会に参加経験のあるチームは得点率が最も高いものとなった。これについて、2019 年の 11 月 22 日（土）に開催された本校授業研究会後の SGH 情報交換会にて、本校の課題研究活動に継続的にご支援いただいている企業の方がプレゼンテーターとして登壇された時にも同様の所見を述べられている。生徒たちの課題研究は問題の捉え方と課題の設定の仕方が重要であることと、もう一つは個人で研究をするのか、複数人で研究をするのとでは研究成果に差が出ており、相関関係が見られた、とのことであった。一人よりは二人、二人よりは三人の方が研究の質が高まる傾向にあるとも述べられていた。つまり、複数人所属するチームで、かつ研究活動への姿勢が前向きで外部評価会などで積極的に他者の意見を取り入れることができ、互いに議論を重ね行動を起こせる関係にある場合、研究の質が格段に高まると言える。なお、外部評価会に参加をしていないチームは、個人であっても複数人であっても得点率に大きな差が見られないことがわかる。

個人研究	研究計画書	経過報告書	最終論文
参加群（4チーム）	19（63%）	15（50%）	22.5（54%）
非参加群（15チーム）	16.26（54%）	14.26（48%）	19.6（47%）
個人研究全体平均（19チーム）	16.84（56%）	14.42（48%）	20.21（48%）

図３　個人研究における参加群・非参加群別平均得点の推移

複数人研究	研究計画書	経過報告書	最終論文
参加群（19チーム）	18.65（62%）	19.16（63%）	27.42（65%）
非参加群（18チーム）	16.5（55%）	14.67（49%）	19.83（47%）
複数人研究全体平均（37チーム）	18.08（60%）	16.97（57%）	23.72（56%）

図４　複数人研究における参加群・非参加群別平均得点の推移



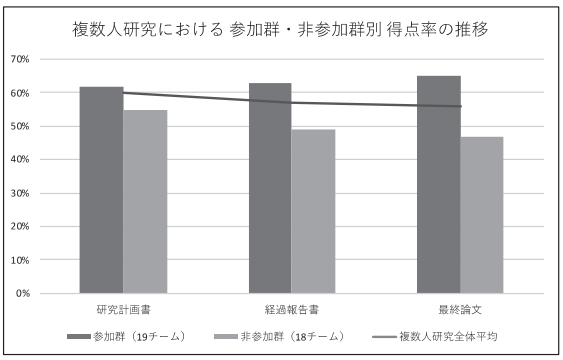


図５　個人研究（左）・複数人研究（右）における参加群/非参加群別 得点率の推移

⑷生徒感想

6 月外部評価会に参加した生徒の感想：

5 年男子生徒 A

文献調査に使った資料にあった落とし穴や、更に調べるべき点が明らかになったので、それを活かしてもっと正確で適切なデータを集めていきたい。また、自分の研究テーマである、「日本人の英語の弱点から考えるその改善法」については「どのような視点から英語というものを見るのか」や「そもそも何故日本人は英語を学ぶのか」など、根本的に見直してみるべき要素があったことが分かった。（中略）自分で家庭教師のようなボランティア活動を行い、その対象となった人たちにデータを取らせてもらう、という提案も頂き、自分のテーマ・計画を一旦見直してみようと思った。

4 年女子生徒 A

今回の会では、研究の根本的な部分の助言を頂くことができた。ゴール設定が近すぎて継続的な活動ではなかったり、「高校生にしかできないボランティア」と簡単に使ってしまっているが、具体的に何があるのか考えてみると分からなかったりして、研究を進めていくスタートの所で、それに気づかせてもらうことができて本当に良かった。（中略）高校生という立場から「高校生ボランティア」というものを考えていたけど、大人から見ると高校生だけではできないことも沢山ある現実を多角的に見ることの大切さも知れた。自分達だけでは気づくことのできなかった課題や可能性を教えて下さり良い機会となった。

10 月外部評価会に参加した生徒の感想：

5 年女子生徒 B

前回の外部評価会にも参加させていただいたのですが、その時からの研究経過を評価してもらうことで、自分たちの研究をふり返るいいきっかけとなったと思います。データを批判的に見る部分では内閣府のデータは国の間によって違いはないのか、などのデータの信頼性に関わる部分について指摘をいただき、調査を深める必要があることが分かりました。（中略）また、研究のために起こすアクションがメリットだけでなく、それに伴って出てくるデメリットも考えながら研究をすすめると良いというアドバイスをいただき、慎重に進めたいと思いました。